

◆三田評論と昭和一〇〇年

我より古を作す

藤原工業大学入学式訓示

茲に記念すべき藤原工業大学第一回の入学式を営み百九十八名の新入学生諸君を迎えますことは、私共の最大の幸福とするところであります。私は藤原工業大学々長として、又慶應義塾々長として衷心より諸君を御歓迎申します。

此度藤原工業大学が新に設立せられまして学生を募集致しましたところ、外部よりこれに応募した志願者総数は約二千八百名、而してこの度選抜試験に合格し、又慶應義塾普通部、慶應義塾商工学校より選抜推薦せられた者と合せて入学の決定致しました総数が百九十八人であります。今日御入学になるところの諸君は実に困難なる試練を経て入学に成功せられたと言つて宜いのでありまして、これは諸君のこれからの長い一生に於ける最も重要な段階を踏み

小泉信三
(塾長)

ことに成功せられたものであります。私は諸君のこれからの長い前途の為に諸君がこの重要な段階に於て成功を得られましたことを深く慶び、将来に向つて最も大なる期待をかける者であります。唯しかしながらこの際諸君に特に心して戴かなければならぬことがあります。と申すのは、今日の諸君の成功は諸君の人生の重要な一段階に於けるところの成功であつて、今後の更に大なる成功は諸君のこれまでの努力如何に依つて定まるといふことであります。既に御承知の如く幾多の青年が一度成功した後、半途に挫折したという例は屢ある。中学を卒業若しくは終了し高等学校、専門学校への入学に成功した幾多の秀才が、様々の事情から半途にして挫折した例は少なくないのであります。健康の為に傷いた者、或は志の堅くなかつた為め中途

で落伍した者、即ち幾多の秀才は重要な一つの段階を踏むことに成功しながら十分の用意と努力とを怠りました爲に、その後の終り有る成功を贏^かち得るに至らずして終った例が沢山あるのであります。私は諸君がこの藤原工業大学予科に御入学になりました大なる成功を祝すると共に、どうか此の成功を立派な終り有るものにして戴きたいと思ひます。私は諸君が今日の成功を飽くまでも終り有るものにせられんことを願ひ、又諸君に向つて深く期待する者であります。

藤原工業大学設立の次第は諸君は既に印刷物に依つてお読みのことと思いますが、我が藤原工業大学理事長たる藤原銀次郎先生は、凡そ半世紀前は慶應義塾に於て御卒業になり、爾来主として実業界に活動せられ、最後には王子製紙株式会社を主宰せられまして所謂製紙王の名を得た方であることは既に御承知のことと思ひます。実業界に於て全く文字通り功成り名遂げられました後に志を育英のことに傾けられまして、此の度その巨額の私財を投じて茲に藤原工業大学を起し、一つにはこれに依つて我国運の隆昌に貢献し、一つには藤原先生や私共の共通の先生であります故福澤諭吉先生の人材養成のことに志を立てられたものであります。即ちこの藤原工業大学は独立の大学でありますが、慶應義塾とは一身同体のものであるということを、特に深く諸君の心に留めて置いて戴きたいところであります。

今日入学をせられましたところの諸君は約二百人である。しかしながら此の日吉台に於て慶應義塾大学予科に学ぶ学生は総数約四千人であります。諸君は茲に新しい大学の一年生として入る最初の学生であると共に、諸君はこの四千人の多数の同胞を持たれるのでありまして、私は諸君が諸君の専門とする学問を勉強せられて、六年の後にはこの藤原工業大学に学んだ甲斐があつたという成績を以て実社会に出られることを待つております。又この慶應義塾大学予科の数千の同窓学生と共に、学生々活の楽しみを十分に享けられんことを願つて已まざる者であります。此の校舎、運動場その他の設備は既に御覧の通りでありますが、此の校舎の外に於ける運動場、校舎の中に於ける図書館、これ等の設備は総て諸君の利用に任せるのであります。即ち諸君は慶應義塾学生と共に慶應義塾の持つ総ての設備を利用せられまして、立派な成績を以て他日卒業せられんことを願つて已まざる者であります。

今日特に私の新入学生諸君に申したいことは、藤原工業大学の歴史は諸君を以て始るということ、即ち是であります。我より古を作す^なという言葉がありますが、諸君は即ち我より古を作す者でありまして、諸君の歴史が即ち藤原工業大学の歴史になる、諸君の成績如何が藤原工業大学の成績如何に関するのであります。此の大学をして声価高き信用あるものとなさしむるから然らざるかは、全く諸君の力に

依つて定まるものであります。今日まで多くの学生が年々入学し勉強しておりますけれども、しかしながら一つの大学の第一回の入学生として、又従つて数年後の第一回の卒業生として自らその大学の歴史を始めるという任務を担当することは、恐らく諸君にのみ許された特権であります。実に得難い機会でありまして、是は天下幾十万の学生の願つて得られないところであります。諸君の一身の経歴とこの大学の歴史とが一致するということは、考えても実に愉快なことであると思います。私共又この大学の関係者として茲に第一回の入学生、即ち後日に於ける第一回の卒業生を迎えまして諸君と共にこの大学の歴史を作り、以て国運に貢献し、又故福澤先生の志を相共に協力して作るということは、実に愉快なことであると言わなければならぬと思います。

今日の入学式は時期に於ても形式に於ても極めて変則なものであります。多くの大学の入学生は四月に入学する。諸君は七月の炎暑を冒して入学する。而も藤原工業大学の永久的建築はまだ出来ておらぬ、臨時の設備を借りて茲に入学式を行うのである。しかしながら我国現在の国運を鑑みますれば私共は一日を^{ゆるが}忽せにすることが出来ないの、即ち諸君と相共にこの酷暑の時日を選び、而も夏休みをも大部分放棄して藤原工業大学の教育の第一歩を踏出す次第であります。此炎熱の氣候の下に於て新に大学に学び、又

茲に諸君と相会して入学の式を営んだということは、後年に至つて諸君にも私にも愉快なる思い出となるに相違ないのであります。どうか諸君と吾々と共に相励みまして光輝ある藤原工業大学の歴史を作りたいと思います。この言葉で以て諸君を歓迎致します。

【一九三九（昭和十四）年九月号（五〇五号）掲載】

（小泉は塾長（一九三三～一九四七）。本稿は昭和十四年七月八日の藤原工業大学【現慶應義塾大学理工学部】一期生入学式でのスピーチ。それまで忘れられていた福澤諭吉の「自我作古」という言葉に再び脚光を当て、その後、この言葉は義塾の精神の一つとなる。）

